

No.75 2005.5  
（株）よかネット

## もくじ

### NETWORK

行政職員が、地域に出て行こう～稲築町の職員の地区担当制～ ..... 2  
七山村で漬け物をネタにインターネット会議 ..... 5

福岡都市圏の住宅需要、市街化調整区域の宅地需要はどうなっていくのか？

第6回市街化調整区域・地域づくり研究会 ..... 6

### 見・聞・食

「焼酎を飲んで楽しい国造りをしよう」独立九州の会 ..... 8

### 近況

忘れられた日本、自分のルーツとしての、対馬を歩く

～地縁・血縁はネットワークの原点～ ..... 10

福岡県西方沖地震特集～そのとき、みんなは～ ..... 13

地山や切り土と、堆積地や埋め立て地とでは、被害が大違い～  
事務所で足の踏み場もないぐらい床一面に本や棚が飛び散っているの  
を見て唖然～地震波と棟方向の角度で、被害の大きさが変わる？～  
マンション一人暮らしにはじめて不安を感じた～  
一瞬「工事かな」と…～福岡県西方沖地震の土木屋的考察～  
地震対策の準備は間に合わなかつたけれども～  
地震で感じた携帯電話のすごさともろさ～  
地震ではじめて家が山で良かったと思った～

### 本・BOOKS

市民参加のまちづくり（事例編・戦略編） ..... 19

### お知らせ

第13回よかネットパーティー ..... 20

豊かな環境・景観づくりと観光産業 ..... 20

## ●3月20日(日)午前10時53分、最大震度6弱の地震が北部九州を襲いました

福岡県西方沖で、マグニチュード7.0の地震が起きました。当事務所内部も、事務所のあるビルも、その周辺も、大小様々な被害が出ました。見えない部分で傷んだところなど隠れた被害もあるようです。復旧作業も徐々に進んでいますが、余震があったり、被害が小さかったりと、そのままにされているところも多いようです。

- 写真①：座席の後ろの本棚が倒れてきた
- 写真②：机の上や本棚の書類が床に散乱
- 写真③：こういうとき時計って本当に止まる
- 写真④：本事務所ビルのタイルにひび割れ
- 写真⑤：建物と前面道路に段差が出来たところの  
復旧工事が始まっている
- 写真⑥：4月20日の余震で再び本棚が倒れた



①



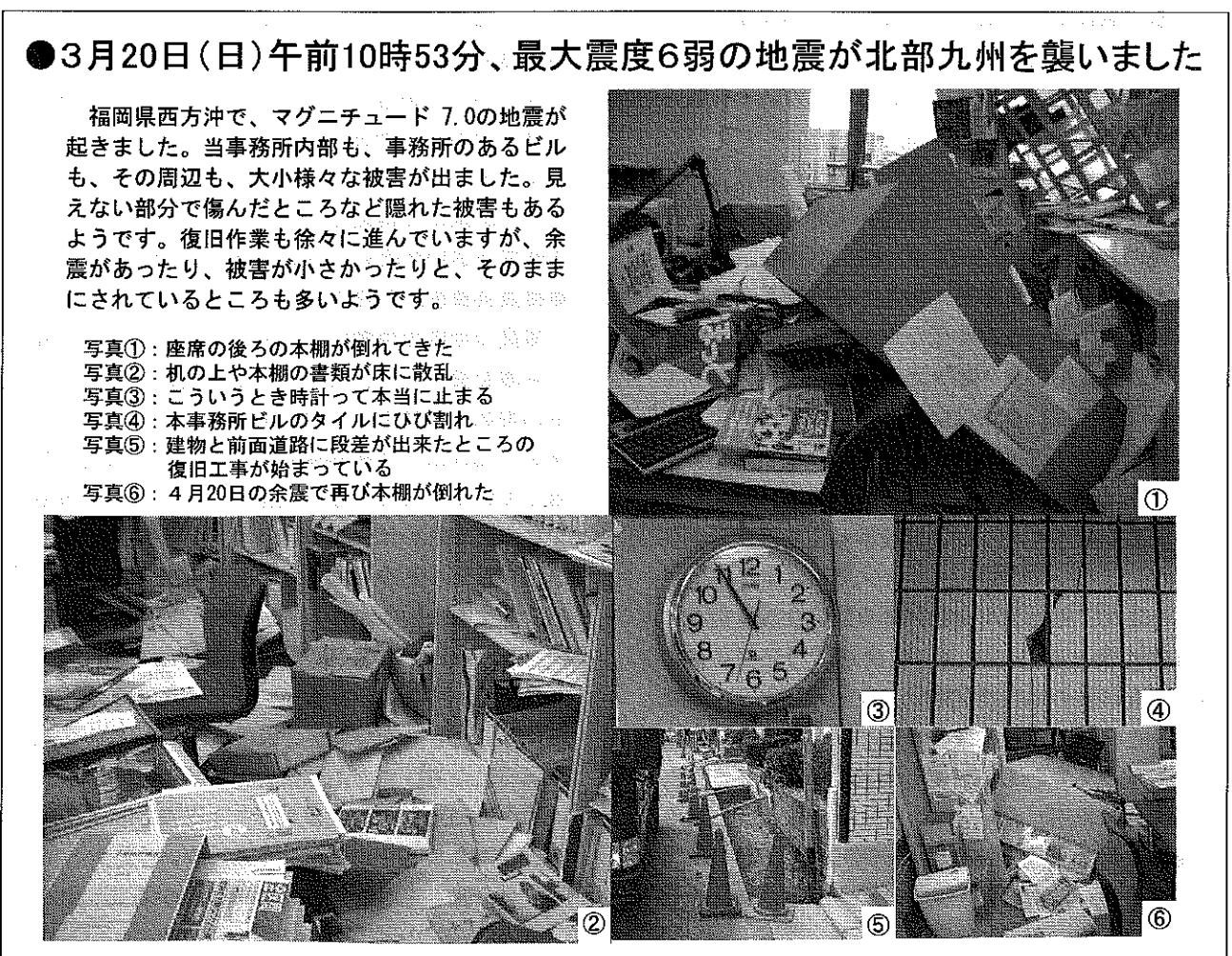
②

③

④

⑤

⑥



## 行政職員が、地域に出て行こう

～稲築町の職員の地区担当制～

伊藤 聰

福岡県稲築町では、「町職員が地域に参加しよう」という取り組みを進めている。構想段階から関わってきたが、行動に移して2年が経つので、この辺りで報告しておこうと思う。

### ●町職員と住民の間に距離感があった

発端は、平成11～12年度に行った第4次総合計画策定の中での、住民と町職員が参加したワークショップの話からである。稲築町は住民と行政との間に何となく距離があった。旧産炭地であることなどから住民の行政に対する依存体質が強く、町職員にとって住民は「要望や文句を言ってくる人たち」という意識があった。また、職員は役場の中だけで仕事をして、まちのことは見ていないという意見も職員自身から挙がっていた。

それを受け、平成13年度から住民と町職員による「個性ある地域づくり委員会」が発足し、住民と行政の協働のあり方、地域コミュニティづくりについて話を進めた。その中で、行政と住民との関係についても様々な意見が出た。

- ・役場に何かを言いに来る一部の人の声だけを聞いて、多くの住民の声は届いてない。それが住民の総意なのか分からぬ。
- ・本当に対応する必要があるのは、何も言えずに困っている人なのではないか。
- ・町外在住の職員の割合が増えている（といつても3割程度。都市部に比べれば少ないので）
- ・町職員は、地域のことをよく知らないまま仕事をしている。
- ・行政の言っていること（提供している情報）が住民に伝わっていない。

そこで、地域（町内会）の自立、住民と行政の協働作業と連動して、「職員が町内会に出向こう」と職員の地区担当制に取り組むことになった。住民と行政の協働作業については、稲築公園のシンボルづくりとして実現した（よかネットNo.66, 68, 69, 72参照）。

### ●地域のことを勉強させてもらう姿勢で

職員が地域に行くとはどういう意味なのか。職

員は地域に行ってないのか。簡単にいえば、ほとんどの職員は、地域住民と地域で直接関係を持つていない。地域へ行っているのは公共工事の関係や、福祉サービスの関係など。地域住民と日常的につながりがあって対等な関係に近いのは、公民館や社会教育くらいではないか。特に、町内会は地域の自治組織であるため、行政との上下関係ではなく、また行政との間にはっきりしたパイプがあるわけでもなかった。

具体的にどういう体制で、どのような出向き方をするかについては、平成14年度に係長級の職員による「プロジェクトチーム会議」を立ち上げ議論した。議論の中で最も気にしていたのは、職員の意識づけと不安を取り除くことだった。

職員が地域に出向く目的は、本質的には地域の自立を図り、そのための手助けをすることなのだが、急にはハードルが高いし、地域が受け入れてくれるかどうかともわからない。そこでまず、地域行事に参加し、住民と顔なじみになることから始めようということになった。住民は、行政が行くとお上が来たと構えるので、「地域のことを勉強させて下さい」という低い姿勢で行くことにした。

### ●職員全員を全町内会に割り振る

職員の地区担当制については、熊本県の宮原町に刺激を受けたが、宮原町では職員に希望を募り、全14地区に担当を2人ずつ配置していた。職員全体から見れば、半数程度の自ら希望する職員が担当していることになる。稲築町でも、最初は希望する職員あるいは一部の職員で、という案だったが、「希望する職員はいないんじゃないかな」「やる人とやらない人を作らない方がいい」「1地区に2人だけは不安」といった意見が出て、「職員全員を全町内会に割り振る」という大きな取り組みになることとなった。平均して1地区6～7人の担当になる。ただし強制ではなく、基本は自主参加。いつでも地域に参加できるきっかけとして全員を割り振るという意味もあった。

全員参加となると、逆に動機付けが重要になる。

そこで、職員として地域の実情を知り行政サービスの向上を図ること、また地域活動に参加すること自体が職員の研修である、といった位置づけを行った。

#### ●不安を取り除くために研修会を開催

とにかく、最初はみんな必要性は感じながらも不安でしり込みしている雰囲気があった。不安を取り除くために、職員の地域とのつき合えい方、職員の心構えなどについて、講師を呼んで研修会を行った。講師からは「表に出てこない地域のつぶやきを聞こう」「地域の『納豆菌』になってバラバラになった大豆（住民）をつないでいこう」といったアドバイスをもらった。

事業名は、「職員の地区担当制」では堅いということで「協働のまちづくり」とした。その基本方針には、事業内容として以下のことを挙げた。

- ①担当地区の行事、まつり等に参加し、地域に入って地域を知り、地域の人と接し、地域と行政のパートナーシップの形成を図る。
- ②実践を踏まえて地域と行政がどのような関係を築いていけるかを検討し、まちづくりに関する情報の交流等を進める。

地域行事等への参加は、1人年3回以上を目指すこととした。

#### ●居住地を基本に担当地区を決める

地区の担当の振り分けが、また一つの大きな問題だった。全員参加が基本なので、それなりにバランスも考えないといけない。会議でも「町内居住者は自分の町内会に行くべきではないか」「自分の所に職員として行くのは変だ」など、意見も対立した。職員の間でも『あの町内会は云々…』といった噂が立ち始め、「希望を取ったら偏ってしまう」との心配も出てきた。

結局、受け入れる町内会側の気持ちも考え、職員は居住する町内会に行くことを基本とした。全職員に希望アンケートを取り、町内居住職員には居住する町内会を希望するかどうか、町外居住職員にはゆかりのある地区があるかどうか（以前住んでた、親族が住んでいるなど）を聞き、さらに地区の第1、第2希望までを聞いた。

アンケート結果は意外にも偏りは少なく、居住地と第2希望まででほとんど収まり、大きな調整は必要なかった。課長・係長が多い、若手ばかり、と構成が偏った地区では、一部調整を行った。

#### ●「参加のしおり」と呼ぶマニュアルを作成

参加前後の手順や内部手続き、連絡体制、留意事項、住民との間のルールなどについて、「参加のしおり」という呼び名のマニュアルを作成した。体制としては、各地区担当班ごとに地区担当代表者を決め、定期的に代表者連絡会議を開催し情報交換する。主要な問題点等については、係長代表者による「プロジェクトチーム会議」で話し合うこととした。「しおり」にはその他、例えばこんなことが書かれている。

- ・地域や住民についての理解を深めるため、積極的に話を聞くなどして下さい。
- ・町内会の自主的・自立的活動を促し、それを支援していくことを目指しています。要望や問題点について自主的解決が可能と思われる場合は、その旨町内会に問い合わせてみて下さい。
- ・担当地区と居住地が同じである職員は、町内会の役職等を引き受けるかどうかは個人の判断に任せます。
- ・行事の打ち上げや懇親会などへの参加は個人の判断に任せますが、一度は参加することを奨めます。ただし、酒の席でのトラブルには十分気をつけて下さい。
- ・飲食費などの負担は町内会との協議によって決めて下さい。ただし、町内会費からの支出になっているのであれば、町内会費を払っていない人は個別に負担するのが基本と思われます。

#### ●最初に「顔合わせ会」を実施

平成15年度から、実際に動き始めたこととなつた。最初に、町内会長会へ趣旨を説明して了解して頂き、その上で各地区担当の代表者が各町内会長へアポイントを取り、「顔合わせ会」の申し込みをした。顔合わせ会では、担当職員の自己紹介と趣旨説明をし、地区代表者からは年間行事や地区の近況等を聞いた。そこで、1年間の参加する行事をある程度決めた。

顔合わせ会では、地元から大そう歓迎され、カーラーライスをごちそうになった、という地区もあれば、アポイントさえ取れない地区もあった。

タイミングとして良かったのは、町主催でやっていた秋の敬老会が、前年度から各町内会の自主開催で行うようになっていたことである。職員が知恵を貸したり、手伝いをするのにいい機会となった。ある町内会では、職員も出し物をすること

になり、水戸黄門の寸劇をやって、大好評だったそうだ。

参加した行事は、敬老会をはじめ、夏祭り、もちつき、地域の清掃などが多かったようだ。

#### ●地域格差、過大な要望

数ヶ月経つと、積極的に参加するところと、参加しないところがだんだんはっきりしてきた。28地区中23地区が、何らかの形で顔合わせなり行事に参加できた。そのこと自体、事前に予想したよりもかなり多い割合だった。始めるまでは「半分行けばいい方かも」くらいに思っていた。その一方で、5地区が全く参加できていない。参加しないところの理由は、地区担当職員の代表者が積極的に動いていない、町内会長から「別に来なくていい」と言われた、連絡したが町内会長から反応がない、といった感じであった。

町内会からすれば、これまでも自治組織として自主運営でやってきたので、当初は「役場が何しに来るんだ」「監視されるのか」「一々報告しないといけないのか」といった疑問も一部にはあったようだ。

一方で、町内会から過大な要望も出てきた。例えば、もっと準備段階から来て力仕事をして欲しい、いい企画を考えてくれないか、といったことである。ある程度協力しながら一緒にやるのはいいことなのだが、単に労力として使おうとか、職員なら何か考えてくれるだろう、となると町内会の自立的活動を支援する目的から離れていく。しかし、自分の居住地である場合、関係が住民としてなのか職員としてなのかラインを引きにくく、難しいところである。

#### ●職員の間に不公平感も

参加状況に差があることで、職員の中に不公平感が生まれている。年に何度か（といっても数回）、ボランティアで地域行事に参加している人が、ほとんど参加していない人より損した気分になっているようなのだ。本来自主参加であるし、参加した方が役場のためになるし、地域のためになるし、自分のためになる、と思うのだが、これを負担だと感じると損した気分になる。参加している方が基準であって、参加していない方に対策が必要なので、参加しない方を見てうらやましいと感じるのはどうかと思うのだが、個人レベルの感覚ではそうなるらしい。

事務局のまちづくり係では、自主参加としたことへのジレンマがある。自主参加である限り強制力はなく、参加を呼びかける程度しかできないからである。しかしその状態では格差は埋まらず、職員間の不公平感は増す。いっぽう、職務とした方が指導できる、という意見も強くなっている。

#### ●市町村合併しても、その意義は益々重要に

課題はいろいろあるものの、職員の研修としてはそれなりの成果が出ているようだ。参加した職員の感想でも、「町が抱える諸問題の縮小版を見る思いがした」「一緒に活動して連帯感が生まれた」「引き継がれている地域の伝統をいかに後世につないでいくかが課題」といった声が出てきた。

行政と地域や住民との距離は以前に比べて縮んだようだ。高齢化の進む町内会では、若い人が顔を出したというだけでも喜ばれている。町長に感謝状を送ってきた町内会もある。

今後の展開は、実は市町村合併を来年に控えているのではっきり見えていない。町内会からも、合併前にこのようなことを始めて意味があるのか、といった意見も出されていた。町内会の意見を一度取りまとめるということも必要だろう。当初の想定では、3年目は次のステップとして、地域理解から地域組織の強化へ進むことを考えていたが、2年やってみて先行きが見えなくなり、やめようかという意見もある。結局、地域からのニーズもあり、合併まで今のまま継続する、ということになった。

新市でどういう取り組みをするか、地区担当制を行うかどうかの方針は出でていない。しかし、地域自治組織の活性化や地域コミュニティの再生など、地域の自治力向上に向けた取り組みは合併によって今後益々重要になるし、行政が地域のニーズを把握すること、地域に密着したサービスを提供することは、合併の有無にかかわらず必要なことである。合併があるということは、市域が広くなり、職員は新しい地域を自分のまちとして関わっていくことになる。地区担当制とするかどうかは別としても、職員が地域に出かけ、住民と接し、地域を理解していく取り組みは、必要性が増すだろう。

(いとう さとし)

七山村で漬け物をネタに  
インターネット会議  
雪丸 久徳

3月16日、NPO日本都市計画家協会が主催するインターネット交流会「お漬け物とまちおこし村おこし」が行われた。これは一つの会場に人が集まって行われる交流会ではなく、インターネットを使って、東京を基点に佐賀県七山村（鳴神の庄）、新潟県村上市（都岐沙羅交流サロン穂！人（ほっと））をつなぎ、漬け物やまちおこしについて紹介しあうといった交流会である。私は七山会場のサポートを担当した。しかし、今回、話のネタとなる漬け物を前もって送り合い、実物を食べながら交流するというかたちで交流会を行ったため、会場は思った以上に盛り上がった。

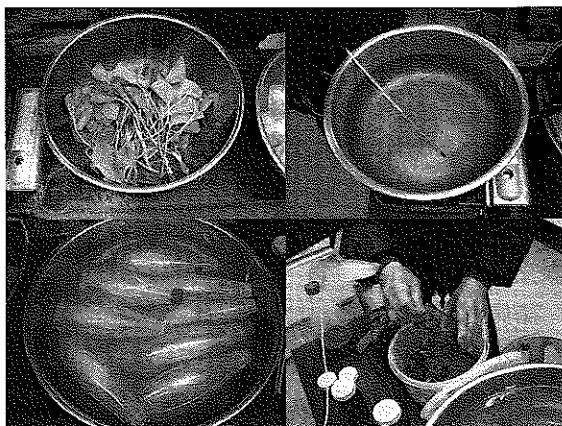
●鳴神の庄の一角を会場に。人気の舞台裏を見た

七山会場は、「鳴神の庄」という、福岡市から1時間かけて買いにくるお客さんが多い人気の農産物直売所の一角に即席でつくることになり、交流会が始まる2時間前（夕方4時）から会場入りして準備に取りかかった。鳴神の庄は、その時はまだ営業中だったので、最近自炊することが多い私は自分用に何か野菜を買おうと思ったが、ほとんど売り切れていた。また、売れ残った商品はその日の夕方に出品者が取りにくるというしくみがあり、閉店すると品物が搬出口に並べられたため棚は空っぽになった。はるばる遠方から買いに来るファンが多い人気の背景、消費者からの信頼・支持を得ている舞台裏をみることができた。

会場は、店の片隅にノートパソコンとスピーカー、マイクなどを持ち込み、話のネタとなる漬け物を机に並べた。出演者は、以前より交流の深い諸熊雅博さん（鳴神の庄出品会会長）を中心に、地元で手作りの漬け物や加工品等を出品されておられる仲間を集めていただいた。七山会場には出演者をはじめ、鳴神の庄の店長・副店長、地元の役場の方や七山の葉わさびファンが集まり、漬け物を囲んで和気藹々とした雰囲気で交流会が始まった。

●七山弁で葉わさび漬け実演

七山村からは、葉わさび、こんにゃく、ゆずこしょう、野菜の漬け物を紹介することとなつてお



葉わさび漬け実演の様子。  
左上：葉わさびに塩をふる前。右上：お湯の温度調整中、  
左下：マヨネーズの空容器に水を入れ氷らせたもの。色が  
変わったらすぐに氷水で冷やす。右下：瓶詰めの様子。



漬物を食べながら、ネットの向こうと意見交換

り、諸熊さんを通じて、東京と新潟に事前に送っていた。そのなかでも葉わさびはあえて生の状態、いわゆる葉っぱの状態で送って、実演をしながら実際に葉わさび漬けをその場で作って食べていただくことにした。

実演では、鮮度を保つための塩をわさびの葉にふるところから始まり、80°Cに調整されたお湯をかけて十数秒待ち、緑色が鮮明になったところで氷水につけ、さらに2~3cmに切ったのちにボールに入れて蓋をし、香りを出すためにそれを振り、最後に瓶につめた。諸熊さんの七山弁での説明に糸乗の解説を交えながらの実演だったが、東京会場は調理できる設備が整っておらず、鍋でお湯を沸かして温度調整する場面で、ポットのお湯しかないとか、氷水がないから今から買いに行くといったハプニングがあり、そのたびに七山会場はどうと笑い声があがっていた。

●七山村は人が元気だから村が元気

葉わさび実演に続いて、七山村のこんにゃく、

ゆずこしょうなどについても、作っておられる本人からつくり方や食べ方などの説明していただいた。インターネット会議という初めての体験で若干不安そうな顔をされている方もいたが、質問に受け答えするなかで徐々に慣れて、後半になると進んで新潟の漬け物について質問するなど積極的な交流が行われた。

諸熊さんをはじめ、地域にあるものを活かして商品を開発している方々と一緒にしばらくの間過ごしたが、地元の皆さんととても活き活きしていたことが印象的だった。この人たちの元気が七山を支えているのだろうと思った。

#### ●まちおこしとインターネット

今回は漬け物をネタに距離を感じることなく交流ができたと思う。まちをPRするツールとして人と人、田舎と都市を繋ぐきっかけづくりとして、インターネットを使う機会も少しづつ増えてくるのではないかと思う。工夫次第では、楽しい交流会もできるので、今後インターネットをうまく使って、まちや人をつなぐきっかけをつくる仕事にも挑戦してみたい。

(ゆきまる ひさのり)

#### 第6回 市街化調整区域・地域づくり研究会

福岡市都市圏の住宅需要、

市街化調整区域の宅地需要は

どうなっていくのか？

山田 龍雄・原 啓介

今回の研究会は、30数年近く福岡都市圏をはじめ九州内主要都市の住宅のマーケティングに携わってこられた木村洋介氏（木村地域計画研究所代表）にお話いただいた。調整区域研究会の中で、住宅需要をテーマとした理由（仮説）は2つあった。ひとつは「郊外部の持ち家住宅は、今後も相当厳しくなるのではないか」、2つめは「調整区域で地区計画等をかけた場合に宅地需要はあるのか、あるとしたらどのようなニーズがあるのか」といったことを参加者と一緒に議論したかったためである。

私共々、最近の福岡都市圏内の住宅動向や需要には関心があったため、3月初めに福岡市東部や宗像市の戸建て団地の売れ行き状況を見て回った。

宗像市ではJR赤間駅に近い桜美台団地などはほとんど完売状況であったが、駅から離れた場所ではかなり苦戦しているようである。福岡県住宅供給公社が昭和63年に販売開始した団地は、坪11万円台まで下げているが、まだ半分近くが売れ残っている。また福岡市西部の田尻土地区画整理事業の宅地販売が芳しくないと聞く。福岡市東部だけでも将来の大規模な住宅計画としてはアイランドシティ（第1期の住宅計画：1,500戸、うち戸建て約240戸）、新宮町のJR新駅設置に伴う土地区画整理事業（計画人口：3,000人）、JR福間駅東土地区画整理事業（当初計画戸数：約3,000戸）、現在進行中のものでは古賀市鹿部土地区画整理事業（計画戸数：830戸）とかなりの住宅の立地が計画されている。しかし、①今後、第2次ベビーブーム世代（概ね30～34歳前後）の持ち家需要は縮小していくこと、②都心部の地価下落によってマンション価格が下がっていること、などを考えると、今後の郊外部での戸建て住宅需要はますます厳しくなるであろうと思われる。そこで、今回の木村さんの話の中でも①都市圏郊外部から都心回帰の状況、②郊外部団地の問題点、③調整区域や無指定（都市計画区域外）での住宅問題、④今度の地震が与える影響などについて、ポイントをまとめてみた。

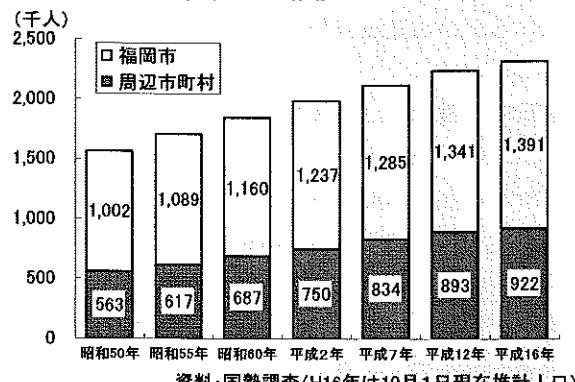
#### ●郊外部へのスプロール現象から都心回帰現象へ

- ・福岡市の人口推移をみると、戦後の25万人から昭和50年の100万人まで年間約3万人づつ増加したが、昭和50年以降は年間1.5万人と増加数は半減した。昭和40年代後半より福岡市外の都市圏に大規模団地が造成され、都市圏郊外部に人口が増えた。昭和50～60年でみると福岡市内の年間増加数は約12,400人に対し、周辺市町（福岡市を勤務地とする通勤者数が該当する地域の従業者20%以上の市町）は15,800人と市内増加を上回っている。

- ・昭和60～平成12年までの人口増加率（概ね5年毎の比較）は周辺市町の方が上回っていたが、平成12年～17年（国勢調査予測値）の5年間には福岡市が上回る結果となる。特に人口増加率が低下しているのは前原市、筑紫野市、古賀市、宗像市である。

- ・このように昭和50年以降は一貫して郊外部へのスプロール化の時期であったが、平成9年に郊

図 福岡市と周辺市町の人口推移



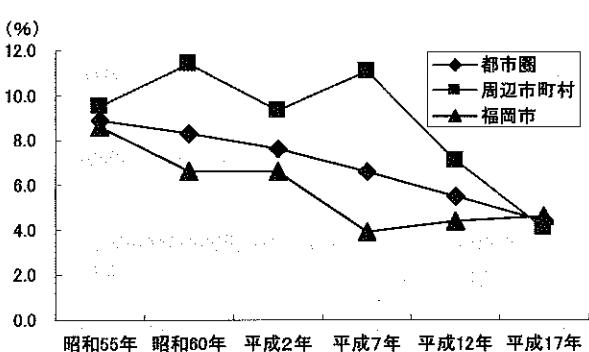
外部の分譲マンション建設が激減したことを転機として人口移動の逆流現象が生まれ、今も加速中である。

- ・福岡市の居住スタイルの特徴として、住宅居住世帯の7割近くが共同住宅に住んでいる。（ちなみに政令都市の中で最も共同住宅に住む世帯率が高いのが福岡市で69.2%。平成12年国勢調査）
- ・子供の時から共同住宅に住んでいて、マンションに移行するのに抵抗がない世帯が多い。
- ・ここ2～3年の都市圏全体のマンション建設戸数は一定しており、5,000～5,500戸であるが、今は福岡市で4,500戸、周辺で1,000戸たらずといった状況である。福岡市の中央区の平尾、大濠、大手門で広めの3LDKが3,000万円を切った物件も出てきている。郊外部で2,700万円の戸建てを買うよりも3,000万円で都心で比較的便利のよいところで3LDKのマンションが手に入る。現在、子供は1～2人なので今の若い世帯は3LDKで十分である。これから従来型の戸建て4LDKといったタイプは縮小していくのではないか。

#### ●郊外部戸建て一辺倒団地から循環型団地へ

- ・昭和30年代後半から昭和50年代にかけて開発された郊外部での団地は、子供が住宅を引き継がないため幼稚園はなくなる、高齢者が多くなって完全に老人団地となっている。大分市のある開発住宅地では高級賃貸住宅を組み込み、人が流動する部分を分散して設けるという計画をしている。
- ・宗像市の自由ヶ丘の場合、次の世代はそこに住まずに外に住宅を購入している。親が死んだら住宅はだいたい売却する。道路も整っている自

図 福岡市と周辺市町の人口増加率



由ヶ丘団地であればなんとか売れるかもしれないが、無指定地区で開発される団地は、宅地も道路幅員も狭く、資産価値はなくなるであろう。

#### ●福岡都市圏住宅市場は年間6万世帯程度

- ・ここでいう住宅市場とは、新規住宅も含めて人口移動で発生する住宅を求める層の総量である。
- ・住宅需要実態報告書によると全世帯に対する移転率は福岡都市圏の場合約30%であるため、年間6万世帯が何らかの理由で移転し、住宅を選択（持ち家やマンション購入、賃貸、親との同居、寮、福祉施設への入居など）していることとなる。

#### 関連する一言ネタ（よかネット調査より）

- ・平成12年に福岡県岡垣町のK団地（昭和40年代後半の開発団地、開発基準制度以前の団地計画戸数2,000戸）で高齢者単身や夫婦世帯へのアンケート調査をした結果、「家を引く継ぐ人がいない：1割」「家を引く継ぐと思うが住むかどうかわからない：3割」となつておらず、古い団地が将来空家化あるいは高齢化していくことがわかった。
- ・福岡県古賀市の都市計画区域外で特に昭和50年以降開発が盛んであった地区的年齢構成をみると、50歳代が地区人口の2割と多く、若い世代が入ってこないと10～15年後には、高齢化率は確実に3割を超えると考えられる。

- ・一方、住宅需要を転入や世帯分離による新規世帯数増加からみると、福岡都市圏の世帯数増加は年平均（平成12～16年）は約15,700世帯である。しかし、住宅着工数は27,800戸であるため、毎年12,100戸がオーバーストック（実際は建替え・滅失も含まれる数）となるという。

- 今回の地震によるマンション需要の影響についてお話をいただいた日が地震発生から9日目で

あったことから、今回の地震がマンション需要にどのように影響を及ぼすのかを話していただいた。

- ・発売延期がかなり発生し、現在工事中のものもかなりダメージを受けるであろう。既に解約している人も出てきているとの話も聞いている。
- ・今年もマンション着工は都市圏で6,000～6,500戸と増加するのではないかと考えたが、そうはいかないだろう。
- ・福岡市内では平成7～9年に建設されたマンションの被害が多いように感じる。この時期の施工状況や建設した場所などの原因があるのかも知れない。

最後に調整区域での住宅需要について質問があり、木村さんは明快に次のように回答された。

- ・無指定（都市計画区域外）と同じように小規模
  - ・低価格を売り物としたものは売れないだろう。
- ・少しゆとりある宅地規模のもので、景観にも配慮した建築のルールを決めたものが求められている。

以上、広範囲な話であったので、中身はかなり絞って報告させていただいた。いずれにしても福岡都市圏の住宅需要は、都心部でのマンション需要がメインであり、郊外部は縮小の傾向といえるであろう。しかし、今回の地震がマンション需要に与える影響はかなりあるのではないかと思う、特に地盤の悪いと想像される立地条件のマンションは厳しいであろう。

（やまだ たつお・はら けいすけ）

### 独立九州の会

#### 「焼酎を飲んで楽しい国造りをしよう」

山田 龍雄

今回は、5年前に焼酎を地域文化として継承し、また焼酎好きな人たちが楽しく飲み交わす場として「日本焼酎学会」を立ち上げられた福岡県立大学の豊田謙二先生に話題提供していただいた。

先生は12年前まで鹿児島国際大学に在籍されていた。その鹿児島時代に焼酎にはまり、以来焼酎の研究をされてきたということで、既に「薩摩焼酎紀行」という本も平成3年に出版されている。

さらに4月に新たな焼酎の本「南のくにの焼酎文化」という本を上梓された。今回の案内では先

生の話に加え、美味しい焼酎も持参してきていただけとの前宣伝が効いたのか、30名近い参加があった。

#### ●日本の酒税法は地域文化を壊している

欧米の酒税をみると食卓酒といわれるワイン、ビールは非常に低い税率であり、蒸留酒は食卓酒ではないため欧米でも極端に高い税率となっている。しかし、日本の場合は、10年前までは焼酎は税率が低かったため、WTO（世界貿易機構）は貿易上不公正であるということで、ウイスキーと同様に高い税率を要求したきた。しかし、この時に欧米と同様に焼酎は食卓酒であるという論法で言い張っていれば、低い税率でよかったのであるが、単に蒸留酒ということだけで税率改正を行ったという。これは食文化の論理でいうならば、矛盾する話である。日本の国税局は税金を召し上げることに主眼があり、食卓酒として地域文化を継承、育てていくという考えがないのではないかと先生は力説されていた。

焼酎は税率があがり、売値も高くなつたが、10数年前から一貫して出荷量は増加しており、長期トレンド（日本政策投資銀行南九州支店）によると、来年あたりには焼酎（甲乙含む）が清酒を追い越す勢いである。

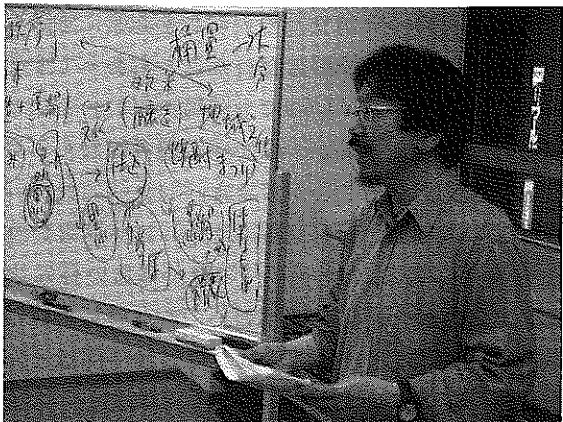
これは焼酎が原点に戻って地域独自の味を復活させ、麹や製法などに努力してきた結果である。

酒税法の話で面白かったのが「宮崎の焼酎は20度で、鹿児島の焼酎は25度が主流であるのは何故か」との質問があった。これは地域文化の違いではなく、戦後一時期、酒税は度数で違ってくるため、宮崎産の焼酎を鹿児島産より安くするための宮崎側の戦略であったとは意外であった。

#### ●焼酎を美味しく飲むには「黒じよか」でチン！

今、焼酎はお湯を注ぎ、あとで焼酎を注ぐというのが一般的な飲み方になっている。一時期焼酎を先に入れるか、はたまたお湯を先に入れるかでよく議論しあったことがあった。どちらを先にいれるかは味にとっては実は大した問題ではなく、熱いお湯を焼酎にいきなり混ぜると焼酎の成分が壊れ、焼酎本来の味を出せないとの話であった。

やはり焼酎のうまみ成分を壊さず飲むには「黒じよか（薩摩焼酎用のお燶）」に水と焼酎を自分の好みの配分で入れて暖めるか、電子レンジで“チン”すればよいとのことであった。また、



お話しをいただいた豊田謙二先生

焼き物グラスでの“チン”でも良いそうだ。私も「黒じょか」を3器ぐらい持っているが、沸かすのが面倒なのでまったく使っておらず、バザーに出そうかと思っていた。手放さなくて良かったと思う。これから「黒じょか」で“チン”して飲むことにしよう。ちなみに先生の話によると、焼酎には甘みをつけるため、甘味料を加えているものがあるらしい。そこで焼酎をじっくり暖めるとアルコール分と水が蒸発し、瓶の底に黒いツブツブが残るものは甘味料をえたものらしく、絶対飲まないと言っていた。

私の記憶でも確かに東京向けの麦焼酎の中には、焼酎独自の甘さではなく変に甘い味のものがあったようだ。

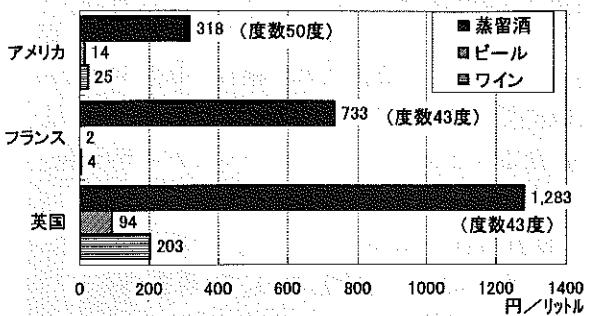
#### ●麦焼酎を最も多く製造している県はどこ？

サツマイモは長く保存がきかないため、芋焼酎はだいたい10月から翌年の1月までに年間の仕込みをしてしまう。芋焼酎の工場は、極めて稼働率が悪い。しかし、この芋焼酎を作らない時期に、なんと麦焼酎を造っているとのこと。鹿児島産の麦焼酎が他県に桶売りされているらしい。

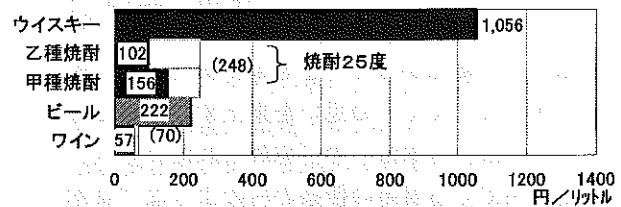
#### ●黄麹、黒麹から白麹そしてまた黒麹へと

麹の話もなかなか面白かった。鹿児島の麹は元々黄麹と黒麹であった。黄麹は酸が少なく暖かい地域では雑菌が入りやすいため品質が安定しなく、また、黒麹は、肺の中が真っ黒くなるという欠点があった。河内源一郎という方が1960年に白麹を発見して以来、多くの蔵元で白麹が、黄麹・黒麹に替わって使用してきた。最近、使いやすい黒麹が発見され、今では「黒霧島」をはじめ、多くのメーカーが黒麹を採用している。泡盛は、一貫して黒麹で造ってきたのであるが、焼酎みたい

図 酒税の比較  
各国の酒税比較(1995年時点)



日本の酒税比較(1995年—カッコは現行税率)



※米国は州税などで併課される。  
為替レートは1995年7月28日時点

資料：日本経済新聞1995年  
に肺が真っ黒になるという問題はなかったのであ  
ろうかという素朴な疑問はあるが、これは今後先  
生にお会いしたときに聞いておこと思う。

この理由をもし分かっている方がいましたら、  
教えていただきたい。

#### ●持参の焼酎試飲で場の雰囲気が変わる

先生が1時間ぐらい話をされた後に、持参され  
た焼酎「萬膳」と「かめ壺仕込み・蔵の師魂（し  
こん）」を紙コップに注ぎ、試飲大会となつた。

「萬膳」は霧島の山深いところで麹菌も手づくり  
りということで、芋特有の甘い香りも残っており、  
なかなかのものであった。「蔵の師魂」は「萬  
膳」に比べて少々辛口といった味であったが、こ  
れもなかなか美味しかった。

試飲すると参加者全員が気分も良くなり、お互  
い話し合いをする人も多くなり、場もいっぺんに  
和やかな雰囲気に様変わりした。まさに美味しい  
焼酎効果の威力である。このあと、豊田先生を交  
え、飲食店が並ぶ天満宮横町の第2会議場へ向か  
ったのは言うまでもない。

昨年の9月頃、先生とお会いする機会があつた  
ときに、「鹿児島大学で先輩方々から鍛えられた  
おかげですっかり身体の方が焼酎体質になつてしま  
いました」と告げると、早速、先生から日本焼  
酎学会の話を聞きした。その場で入会の申し込みをお願いすると許可をいただいた。今回、改

めて先生の焼酎の話を聞いて、原料や麹菌の変遷、製造方法、飲み方のルールなど、焼酎を地域文化といった視点でとらえるとなかなか奥深いものがあることがわかった。これを機会に私も単に飲んで騒ぐだけではなく、少し焼酎の蘊蓄を語れるようになろうと思った。

(やまだ たつお)

### 忘れられた日本、 自分のルーツとしての、対馬を歩く

～地縁・血縁はネットワークの原点～

本田 正明

私は2つの視点からずっと対馬にあこがれてきたのだが、ようやくその思いを果たすことができた。1つ目は、宮本常一の「忘れられた日本人」の最初に出てくる対馬の伊奈の村のような“日本らしさの残る漁村”を見られないだろうかということ、2つ目は自分のルーツとしての対馬を一度は訪れてみたかったためである。

#### ●自分の帰る場所、故郷がないという不安

私の母は対馬の峰町（現対馬市）出身なのだが、私が生まれた時には、祖父母もそろって博多に出てきていたので、“母の実家といえば博多”というイメージしかなかった。父の郷は、北九州市の隣の中間にあるのだが、祖父母も亡くなり親戚も地元には一人も残っていないので、まったく帰る機会がない。父は転勤族で北九州や山口、鹿児島、京都、東京、静岡と転々としているので、お盆や正月になると現在は静岡に行くことになるのだが、静岡の土地柄を知らない上に友人も誰もいないので、“実家に帰る”という感覚がまったくない。そのためか、小さいころから“故郷”や“幼なじみ”といった言葉がうらやましくて仕方がなかったのを覚えている。3年前に個族化の問題について研究したときも、“次の世代とのつながりが欠けやすい状態”になっている個族に、人一倍関心が強かったのもそうした自分自身のバックグラウンドがあるためかもしれない。

#### ●集落の人たちが親戚だらけ

私が対馬を訪れるきっかけになったのは、10年前に母方の祖母の葬式のときに、対馬でイカ釣り漁をしている叔父と会ったことである。叔父といつても母のいとこなので、かなり遠い親戚なのだが、1年のうち11ヶ月は海上生活をしているので

“人と人とのつながり”的大切さを非常に意識しており、お互いが酒好きだったこともあってすぐに仲良くなった。「いつでも対馬に来い」といつもらっていたのだが、なかなか機会がなく、今回ようやく訪れることができた。

叔父の家は美津島町（現対馬市）の犬吠という漁村集落にある。「50戸で200人ぐらい住んどる」という話だが、1985年ごろの統計資料で世帯数51、人口239と書いてあるので、20年間ほとんど変化していないようだ。以前は8割ぐらいの人が漁師をしていたらしいが、現在は5割もいない。福岡に行ったり、公務員やサービス業で働く人が増えたのだそうだ。

祖母が若いときにずっと暮らしていた集落ということもあって、いたるところに親戚がいる。「お前のばあさんのいとこだらけやぞ」と対馬訛りで叔父が集落の中を案内してくれる。あんたのおばあちゃんとはよく遊んだとか、一緒に洗濯したよ、というような話があちこちから出てくる。自分の知らない祖母の姿が浮かび、なんだが10年前に死んだ祖母が生き返ったような錯覚を受けた。

#### ●対馬は米がとれないで漁業の町になった

対馬にはほとんど平地がなく、入り組んだ湾ごとに漁村が張り付いているという感じだ。犬吠もそうした典型的な集落で、これ以上戸数が増やせるような土地は余っていない。角川日本地名大辞典には、江戸時代の「元禄郷村帳」をもとに美津島の当時の人口と石高を2,482人、802石と書いている。1石は、だいたい1人が1年間食べていける米や作物量なので、昔から作物の生産性が非常に低い土地柄なのだ。叔父も若いときには、漁業ではなくサツマイモと麦の二毛作の農業をやっていたそうで、それでは食べていけなかつたので漁業に転向している。

#### ●イカ釣り漁業はハイリスク産業

叔父の船は、近くの造船所でエンジンのメンテナンスなどを行っていた。19トンの船で1億4千万ぐらいするそうだ。実際に乗せてもらうと、自由に使える室内スペースは1畳分の船頭ルームと2畳分の船員部屋（寝室はその床下にあり、2~3人がここで生活する）ぐらいしかない。自分がこんなところに11ヶ月も生活すると気が狂うのではないかと思ってしまった。4日ばかりでエンジン修理をするのは、かなりタイトなスケジュール

らしく、造船所のエンジニアは夜も徹しているそうだ。それだけ漁を休む日を増やすのは大変らしい。昔は水揚げ高で一日200万円以上になる日もあったそうだが、現在は100万円分揚げる日が年に数回しかない。月に10日以上も漁ができる赤字になってしまったそうだ。天候や漁場の問題だけでなく、船のトラブルなども考えると10日ぐらいはすぐになるような気がする。あらためて漁師はハイリスクな商売だなと思った。司馬遼太郎の街道をゆく「壱岐、対馬の道」の中で、「対馬はやはり漁村文化が基底になっているのではないか。漁村文化は農村とはちがい、一攫千金の可能性をつねに持っている」という記述があったが、その文化は今も生きているように感じた。

空港から厳原の市街地に向かう幹線沿いに、パチンコ屋と消費者金融のお店が乱立しているのを見て、私は嘆息としたのだが、「対馬には娯楽が他にないことを見透かされるとけん、全然玉は出らん。飛行機代をかけても福岡市内でやった方が絶対ましや」と叔父が話してくれた。それでも駐車場にはかなりの数の車が止まっていた。

#### ●対馬には内向き(島内向き)サービス業が多い

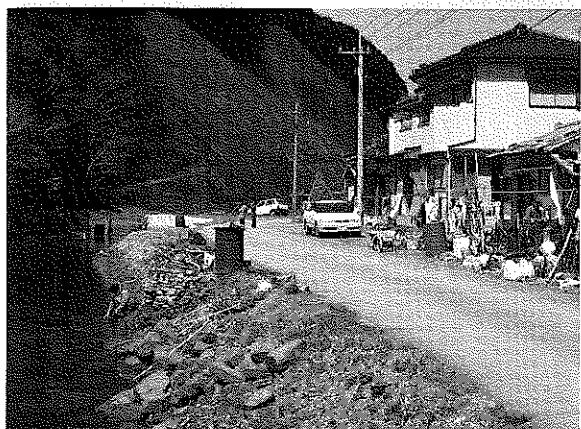
対馬についていたその夜は、漁師たちの飲み会に混せてもらったのだが、家を出る際に叔父が「城下に行くぞ」といったのだが、その意味がわからずにいると、50代ぐらいまでの世代は、厳原のことを城下といっていたのだと教えてくれた。古来島府の雰囲気を感じるような言葉なので、若い人たちも使ってほしいと勝手に思う。

漁師たちは宵越しの金は持たない、といった感じで非常に気前よくお酒を飲む。料理の値段も聞いてみると福岡で食べるよりも高いくらいである。観光客を相手にするよりも地元の漁師を相手にした方がよっぽど稼ぎがいいようである。41千人の島にしてはスナックの件数が多いのも頷ける。

#### ●和多都美神社には磐座が残っていた

次の日は、朝から叔父が上<sup>かみ</sup><sub>あがた</sub>県(対馬の北側)を案内してくれるというので、2つのワダツミ神社だけはみたいと注文を出して案内してもらった。

最初に訪れた豊玉町(現対馬市)の和多都美神社は、広島の厳島神社と同じように鳥居が海中にもせり出しており、韓国の方を向いている。御祭神は豊玉姫命(とよたまひめのみこと)だ。氏神様が町名になっていたなんてかっこいいなあと思



海が生活と一緒にになっている犬吠集落

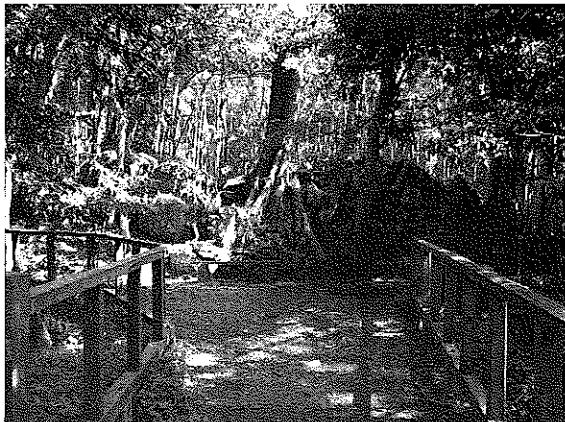
いわくら っていると、神社の裏には磐座がきれいに残っていて、豊玉姫之墳墓とかかれた岩まである。木の柵はあるものの、人間の手があまり入っていない自然も周りに残っており、ここに神様を迎えていたのだなという雰囲気が残っている。対馬のパンフレットなどには海中の鳥居ばかり取り上げられているのだが、こちらの方がはるかに価値があるよう思った。

#### ●祖父の郷は、今でも牛が普通に歩いているようなところ

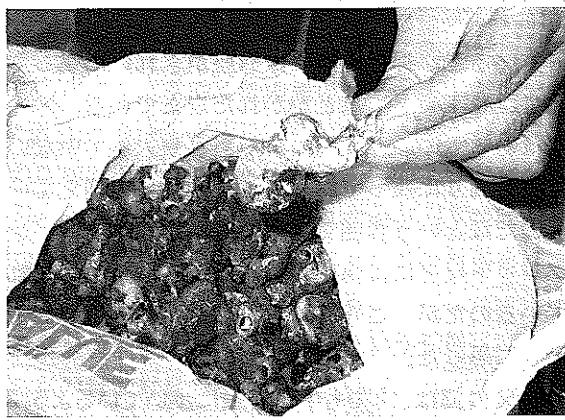
ちだつか 次の木坂の海神神社は峰町にある。祖父が若い時にいたところなのだが、本人には峰の2番地にいたということぐらいしか聞いていなかった。それでもせっかく来たのだから探してみようと雑貨屋のおばさんに尋ねてみると、「役場付近やろうけど、よくわからないね」と言われた。扇という名字なのだが知らないかと聞いてみると、「ここには扇さんは結構おるよ。あんたさんもどこで見たことがあるような顔やねえ」と言われた。おばさんなりに気を使ってくれているのだろうが、地縁とはこんなものなのかもと思ったりもした。結局場所はよくわからなかったが、対州牛が道ばたで草を食べていたりするような場所で祖父は暮らしていたということがわかつただけでもよかったです。

#### ●対馬一ノ宮は2つあった

海神神社では、初めて20人くらいの観光客と遭遇した。話をしてみると東京からツアーで来たらしく。なぜ対馬に来たのかなどもう少し話を聞きたかったのだが、なんでも飛行機の時間が迫っているらしく、境内にもほとんどの人があがらず、あつという間に去っていった。500段ぐらいの階



神々しい雰囲気が漂う磐座。豊玉姫を祀っている



地元の人がブドウといっている貝の一種？  
ゼラチンのような食感がした。

段を上るとかなり大きなお宮があったのだが、豊玉町の神社よりも大きいくらいである。社務所に行ってみると誰もいなかったのだが、お守りなどはちゃんと置いてあって、無人販売所になっていた。それをみると「対馬一ノ宮」と書いてあるのだが、豊玉の和多都美神社でも同じように書いてあったのを思い出した。どちらも由緒がありそうな神社なので、どちらが延喜式のものか、はつきりしないのだろう。

#### ●ローリスク型の観光産業は漁村文化の気質に合わないのかもしれない

叔父は、私が対馬のどんなところを見たいかをわかっていてくれたみたいで、観光地だけでなく地元の友人や知人を紹介してくれて、どんな生活をしているのかを教えてくれた。養殖をしている人や昔は暴れ者だった人とか、いろんな人にあつたのだが、漁業に関わる人がほとんどであり、養殖や商店などと兼業をしている人が多かった。漁師の友人なので偏るのは仕方ないのだが、友人と別れた後に、「あいつは老けて見えるけど、俺と同じ年だよ。養殖でずいぶん苦労したんだ」と話

してくれた。漁業はリスクが高い商売なので、いくつかの商売を掛け持ちしながらなんとか生計を立てているのである。叔父の家も対馬の2つの島を結ぶ万関橋のすぐそばで、喫茶店を経営している。叔父の話で、そういう事情がようやくわかつた。

もっと対馬の資源を活かしたローリスクな観光産業に力を入れれば、もう少し収入になるのではないかと思うのだが、単価が安く、都市の人間に気を使う商売は、漁民文化の気質にはなかなか合わないのかもしれない。

#### ●祖母の縁が私を犬吠につないでくれている

夜は近くの親戚や漁師も呼んで盛大におもてなししてくれた。祖母の遠い親戚という人がアワビやザザエなどもくれるし、漁師は地元で“ブドウ”と呼ばれる、めったに食べることのできない珍味まで持ってきててくれた。「うちらがいつもこんなものを食べるのは思うなよ」とみんなからさんざん言われながら食べていると、叔父が冗談まじりに「みんなお前をもてなしてんじゃないぞ、お前のばあちゃんをもてなしているんだぞ」といわれた。本当にそうだと思った。祖母にとつて私が初孫だったので、ずいぶんかわいがってもらつたのだが、今でもかわいがってもらっているのだ。

宴会が盛り上がりてくると、どこからともなく人が増えてくる。おっさんたちの飲み会なのに、中学生の女の子がひょっこりと加わってきたりする。都会じゃ考えられないことだが、今の都会の若い人たちには、きっとこういう人づきあいの経験が欠けているのではないだろうかと、改めて感じさせられた。ちょうど来月から福岡に就職する女の子もいたので、「右も左もわからんから面倒みてやってくれ」とそのお父さんらしき人に頼まれてしまった。田舎の血縁・地縁は本当に濃いのだなと感じながらも「これからは、ここ（犬吠）を故郷と思ってええぞ」といってくれた叔父の言葉が本当にうれしかった。

(ほんだ まさあき)

## 福岡県西方沖地震特集

～そのとき、みんなは～

平成17年3月20日（日）午前10時53分、福岡市の沖合で大きな地震が発生しました。マグニチュード7.0、最大震度6弱でした。被害に遭われた方には、お見舞い申し上げます。地震が少ないと言われる福岡では、貴重な体験となりました。所員はそのとき、自宅にいたり、外に出かけていたり、たまたま事務所に来ていたり、様々な場所で地震に遭遇しました。それぞれの体験と被害状況をお伝えします。

### ■地山や切り土と、堆積地や埋め立て地とでは、被害が大違い

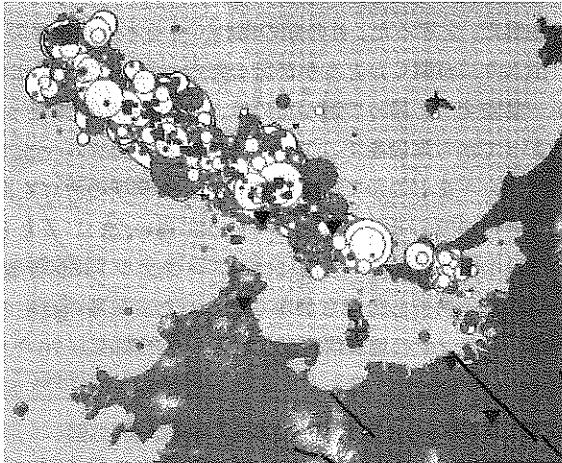
#### ＜眼の前で本箱が倒れたがとにかく8階から脱出＞

ドンと突き上げるとともに、すぐに横揺れが来た。私は関西出身なので「これはかなりの地震だ」と思った。目の前の倒れてくる本箱を左手で支えながら、「どこが一番安全かな」「出入り口が開くかどうかが肝心だな」「とにかく脱出しなきゃあ」と思い、慌てた。丁度、私は当日の出張準備の資料を取りに事務所に来ていた。資料をまとめて帰るためにカギを掛けようとしていたが、カギの掛け方がわからず、方法を聞くために愛甲さんの携帯にTELを入れていたところだった。どこが一番安全かと思って選んだのは、出入り口の壁際だった。すぐにドアを少し開けてみて、治まってから階段を下りていった。駐車場のクルマまで行って、ラジオを聞こうと思ったのに、カギをどこかで落としていた。事務所のカギを閉めて帰ろうと思っていたときにグラッときたので、そこに落としているに違いない。また8階まで上がって降りるのはいい気分ではなかった。外の道路では、アスファルトにクラックが入っていた。

電話は、携帯も公衆もかからなくなってしまった。糸島の自宅のことも気がかりで、急いで帰るしかない。ラジオの地震情報は「震源地は下関西方70キロ」と言っていたが、西に行くと木造住宅の屋根瓦が、落ちたりずれたりしていた。

#### ＜我が家では、玄関で手榴弾が破裂していた＞

家にたどり着いたが、一応、孫たちも家も無事だった。もちろん、本箱が倒れガラスが割れてい



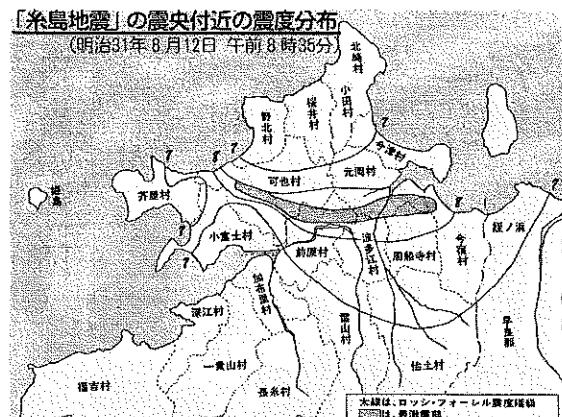
30km以浅の地震活動  
(九州大学地震火山観測研究センターホームページより)



地震で割れた手榴弾

たが、余震も多いのでそのままにして東京出張をこなすことにした。手榴弾の話は写真を見ていただきたい。二個のうち一個が割れてしまった。少し解説を加えると、60年前の太平洋戦争末期には鉄などの金物が不足していて（末期ではなく戦争を始める前からであった）、手榴弾を焼き物で作った。半切の煉瓦と見比べていただきたい（※）。我が家は、山が延びた丘陵地の先端にある小高い丘の上にある。周囲の宅地などより10メートル高いかも知れない。ここに住むことにしたとき、6年前のことだが「津波は大丈夫だな」と思った記憶がある。「丘の上だから心配だ」と思いながらクルマを走らせていたのだが、外見からは何もなくてホッとした。

翌21日は早朝に東京に発ち、夜遅く帰ったので何も分からず、22日朝出勤のため外に出ると、近所のうちにもブルーのシートが目立っていた。この地域は棟の瓦は土をおいて載せているだけなの



広報しま(2003年8月)に掲載された「糸島地震」の図



で、やられているものが多かったし、棟が波打っているものもあった。世間はかなりの被害である。

第一感は、「我が家は地山だったから助かったんだ」であった。

#### <震源と我が家との位置関係>

20日午前10時53分の最初の震源は、我が家からほぼ真北へ17~8キロのところで、深度10キロである。直線距離にして20キロぐらいか。ところが、それに続く余震の震源は、どんどん南東に延びていき、延長が30キロぐらいになっている。そんな中で感じた変な感触を書いておきたい。最初の地震にはドーンと突き上げられて、すぐにグラグラときた（震度6弱）。その後の震度3~4の余震はドンときてユラユラとなった。すぐにテレビをつけて、震度と震源をみる癖がついてしまった。ところが2週間ぐらいたったときの余震は、突如にテレビの字幕に震度3と出て驚いた。震源が海の中道の東側に移っていて私のところから遠くなっていた。一口に余震といつても震源の連なりに注意をしなければならんと思った次第。

#### <107年前の糸島大地震のこと>

ここに掲げた図は、糸島郡志摩町の2003年8月の「広報しま」からの転載である。「福岡には地震はないんだ」と思っていたという話がよく出てくるが、私はこの広報をみていたのでそうは思っていなかった。糸島大地震（明治31年8月、前震が10日に2度、12日午前8時、大きい余震が午後1時と記録されている）の話は、阪神大震災の直後にも取り上げられている。西日本新聞の95年1月29日の記事によると、94年に太田恵美子さんという学生が、卒業論文で取り上げていて、糸島地震は震度5~6と推定している。広報しまの図上の数値は少しオーバーなように思う。いずれにしても「約一ヶ月間竹藪の中で暮らした」人たちもいたということである。気になったので、当時最も震度の強かった旧可也村の海岸部に行ってみた。ここは堆積地である。今回、少しではあるが道路の亀裂も液状化も起こっていた。

#### <私の体験的地震対策論>

地震には、どこで遭遇するか分からない。規模も全く予想できない。運に任せるということかも知れないが、家の中の家具などの転倒や散乱防止などの後かたづけぐらいの意味では、それなりの対策もあるようだ。日頃からの心構え程度のことを、体験的にまとめてみる。

①我々の住んでいるところの地盤には、いろいろな違いがあると思った。

- ・地山および切り土

- ・堆積地：舌状地といわれる地形があるが、地山の先端のように見えて地辺りによって形成されたところは堆積地である。

- ・谷筋の堆積地

- ・海岸部などの堆積地

- ・埋め立て地：最近の新規造成宅地はほとんどこれ

②建物および屋根：糸島ではほとんど屋根の被害だけだったようだ。福岡市内の警固断層沿いのマンションの中では、1~3階でクラックがはいつていた。阪神大震災の時には、1~2階がつぶれたり、ピロティ部分が落ちたりしていたが、福岡でも被害は小さいが同じようなことが起きていた。

③本箱や食器入れの戸棚など：日頃から対処していたわけではないが、何となく動きにくくするように、本箱をL字型に立てたり、コの字型にしたり、ソ

ファの椅子を突きつけて置いたりしていた。これが散乱防止になり、大変有効だったようだ。つまり最初の揺れを不自由にさせるのがいいのではないか。

④都市計画という視点では：①に書いたように地震はいつ、どこに、どれくらいのものがくるか分からない。昔の人は河川の氾濫などに対して、住む場所についてはじめから考えていた。津波についてもそんなことが言われている。この1月に鎌倉大仏の1498年の津波の様子を感じるために行ってきた（よかネットNo.74）。そこでは海岸沿いに多くの建物が建っていた。誰でもすぐ忘れるのだろう。

結局、都市計画屋は土地条件の情報サービスをし、計画をする場合でもそこが地山なのか埋め立て地なのかを考え、土地の鑑定評価でも安全度に差をつけるべきなのだと思う。できれば、現在の情報力を活用して、昔の人が地元に言い伝えで蓄積していた程度の情報を、外部の人でも見られるようにできないだろうか。

#### <地域情報の受け継ぎ率>

百年以上前となると、生きている人は一人もいないのが普通で、直接情報はないことになる。それを60年で見たらどうか考えてみたい。物心がつく年齢を5歳と考えて計算してみる。

#### <全国編>

60年前の5歳以上人口の内現生存者／現在の人口＝直接情報残存率

#### <地域編>

60年前の5歳以上居住者の内・非転出者率／現在の人口＝ 同上

このことを福岡市で考えてみると、およそ5パーセント程度とみられる。60年前と比べると、人口が4～5倍になっているので、戦前を知っている人はきわめて少ない。

今回の地震の中で、地域情報の受け継ぎがきわめて難しいことだと感じた。知的情報受け継ぎインフラストラクチャーの構築は、地域づくりの最重要課題だと思った。

※手榴弾のことをもう少し説明しておく。当時は鉄がないということで、あらゆるもののが代用品になっていた。各地の民具博物館などにいくと、こんなものまで鉄の代用品を作っていたのかと、驚くことがある。確か江戸東京博物館にもあったよう

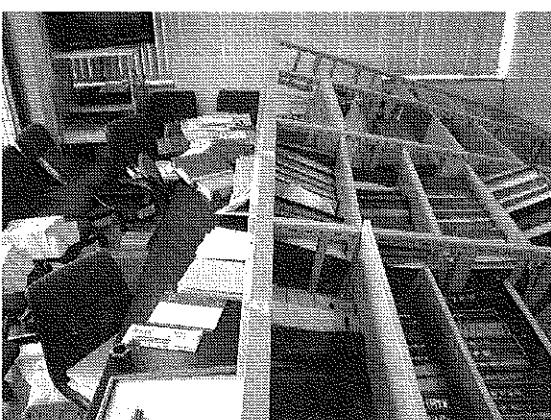
に思う。しかし、焼き物の手榴弾という話に驚いて、持っている人から無理を言って分けていただいた。出所は、佐世保の三菱重工の裏山である。重量は400グラム、直径7.5センチ、高さ8.5センチである。花瓶に丁度いい。実際にこのようなものが使われたのかどうかは分からない。

（糸乘 貞喜）

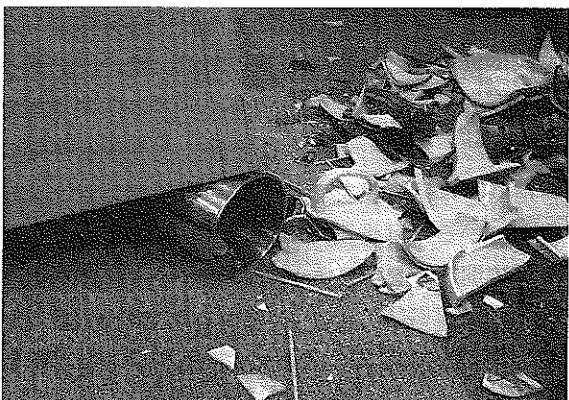
#### ■事務所で足の踏み場もないぐらい床一面に本や棚が飛び散っているのを見て唖然。

そのとき私は、自宅で新聞を読んでいた。急に波長の短い縦揺れがきた。一瞬、最近調子が悪い我が家洗濯機がついに壊れたかと思った。次に大きな横揺れが来たときに初めて、「これは地震だ」と思い、すぐにガスコンロの火を確認した。あとで考えると意外と冷静であったと思うが、これが震度7～8であったならば、ここまで余裕があったかどうか疑わしい。我が家は福岡市東区の埋立地に建っているマンションの4階であるが、幸いにもタンスなどは倒れず、水屋の食器が10数個飛び出して壊れたぐらいの被害で済んだ。

すぐに、昨年の台風でも良く揺れた事務所のことが気に掛かり、30分後ぐらいに女房と一緒に出



会議室のフレーム棚が一列バッタリと



揺れた弾みで、本棚の下に偶然はさまったマグカップ

## 近況

かけた。車で事務所に行く途中、博多部の海側に建っているマリンメッセやサンパレス付近の歩道のインターロッキング舗装がデコボコになっていたり、歩道と車道との境目に隙間が出来ていたりと、事務所に近づくにつれ不安になってきた。それでも、事務所でも食器類が飛び出し、いくつか背の高い棚が倒れているぐらいであろうと思っていた。

事務所に着くとエレベーターが停止していたため、8階まで駆け上がった。事務所を覗くと、ほとんどの棚が倒れていた。床は足の踏み場がないぐらい本が飛び出し、冷蔵庫も倒れドアが開き、ピーピーとブザーが鳴っていた。額や投光台のガラスなどは棚や本にぶつかって粉々に割れ、受付カウンターの上に置いていたプランターも倒れ、砂が飛び散っていた。水屋も倒れ、中にあった湯呑みや皿は全滅状態であった。こんなにも本が飛び散り、ほとんどの棚が倒れている光景は予想だにしていなかった。

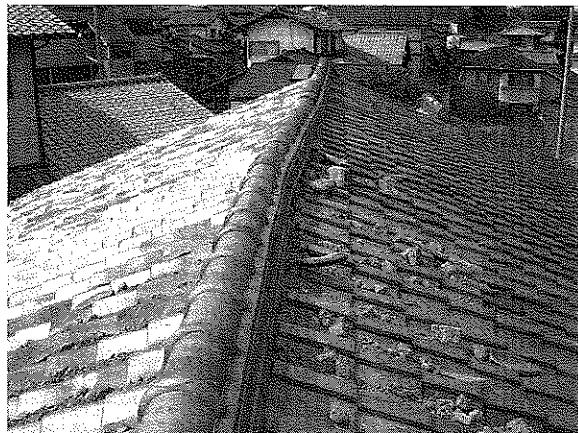
すぐに雪丸が来たので、とにかく歩けるスペースだけでも確保しようと、女房は細かく飛び散ったガラスや食器類の破片やプランターの砂を拾い上げ、男2人は棚を立て直し、本の片づけを行った。糸乗から電話があり、何と先程、事務所に資料を取りに来て地震にあったとのこと。唯一事務所の棚崩落現場の目撃者である。さぞ怖かったであろうと思う。次の日は祭日ではあったが、所員全員に声をかけ、何とか火曜日の業務には差し障りのない格好まで片づけた。幸いパソコンとサーバーが無傷であったのが救いであった。

あの話としての反省と教訓。我が家で横揺れが激しくなったときにガスコンロは確認したが、避難のために玄関ドアを開けるのを忘れていた。新聞報道などの被害状況によると中央区のマンションでは軀体は大丈夫であったが、壁やドア周りにかなりクラックや穴が空き、ドアの開閉が出来ない状態のものも多かったと聞く。今後、建築の構造基準は変わるであろうが、既にマンションに住んでいる人は地震時には「火」の始末とともに、「ドア開閉」を頭に入れておかないといけない。

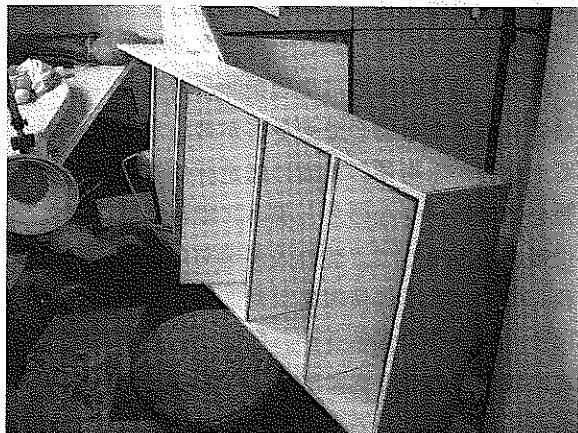
(山田 龍雄)

■地震波と棟方向の角度で、被害の大きさが変わること?

そのとき私は、こたつに入り、テレビでホリエ



棟瓦が波打ってしまった。(原の自宅)



棚が倒れ、中のものが床に散乱した。(原の自宅)

モンを見ていた。「そろそろ会社に行こうか」などと思っていると、突然身体が浮くような衝撃が来た。その瞬間は何が起きたか分からなかったが、すぐに横揺れが始まり、「地震だ!」と叫んでこたつに潜り込んだ。しかし、私がそのときにいた部屋は、24畳の広さに対して柱が一本もない居間で、台風が来るたびにミシミシといやな音を立てる、頼りない部屋だった。子供の頃から、「地震や台風のときにはこの部屋におっしゃいかん」と父に言い聞かせられており、こたつに潜ってみたものの、「このままだと、こたつごと屋根につぶされて死ぬかもしれん」と思い、壁と柱の多い廊下に走って逃げた。

廊下で揺れがおさまるのを待っていると、ガラガラ、ガシャーンという大きな音が家中のいろいろな方向から鳴っている。揺れがおさまり、家の中をみると、タンスは倒れ、食器、ガラス細工・置物等が床に落ちて割れ、土壁のいたるところにヒビが入っていた。さらに次の日、余震を恐れながら屋根に登ると、棟瓦がうねり、瓦が地面に落ちていた。屋根からご近所の家々を見渡すと、う

ちはまだましな方で、棟瓦が全て落ちてしまった家や、軒が崩れた家などが見られた。

屋根に被害の出た住宅は棟の方向が地震波と垂直のものが多いということを聞き、再度屋根に登ると、確かにブルーシートが被せられた家は、ほぼ同じ方向を向いて建っている。実家は福岡市城南区田島というところにある。岡の上の斜面地で、地盤が弱いとは思っていなかつたが、どうやら地震波に対して角度が悪かったらしい。

うちは築30年、あまり手入れもしていない家なので、「これくらいの被害で済んでよかつたな」というぐらいのものだが、余震の度に居間の壁や天井はミシミシという音を立てる。居間にいるのが少し怖い日々が続く。 (原 啓介)

#### ■マンション一人暮らしにはじめて不安を感じた

そのとき私は、自宅（7階）でコーヒーを飲むためにお湯を沸かしていた。パニックになり、火を消すことすら忘れ、必死に机の下へ転がり込んだ。観葉植物の鉢が転がり落ち、大事にしていたレコードプレーヤーに土が散乱。間もなくパソコンの本体が机から投げ出され、足下に転がり落ちてきた。一瞬の出来事だったが、凄まじい揺れにしばらく放心状態になった。とにかく、地上に降りて安全な所へと思い、ガスを止めて1階まで駆け下りたところ、既に大勢の人が道にあふれていた。しかし、その中の誰一人として知らなかつた。携帯電話も不通で、不安な時間を過ごした。そこに一人でも多くの友人や近所の仲間がいれば少しは安心できたと思う。私の住むマンションは約90戸あるが、人とのつながりが全くないことを実感した。 (雪丸 久徳)

#### ■一瞬、「工事かな」と…

そのとき私は、自宅のダイニングキッチンで掃除機を掛けていた。自宅は直方市で、福岡市からは東へ40km離れている。最初、何やらマンションに地響きがして「大きな改修工事でも入ったのかな」と思った。後で思うとそれが縦揺れだった。ちょっと間があって、グラグラッと揺れだし、地震だと気付いた。妻は子どもに「テーブルの下に入りなさい！」と叫びながら食器棚の扉を急いで閉めた。私は何をしたらいいか分からず、大きく揺れる蛍光灯を立ったままただ押さえていた。部屋の中で、ガチャーンというガラスが割れたような音がして、これは大変なことになっているぞ、

と思った。揺れがいつ終わるか分からないその時間は、一瞬にいろんな事が頭をよぎる長い時間だった（ニュースによれば20秒くらい）。揺れが収まって部屋を見渡すと、ビンが落ちて中のビーズが散らばっただけで、被害らしいものは結局なかった。直方市の震度は5弱、うちは8階建ての4階だった。

縦揺れのとき、近くの墓参りを行っていた父母の話では、横の道路を大きなトレーラーが通り過ぎていったのかと思ったそうだ。他に、ちょうど外にいた人の話を聞いても似たようなことを言っていた。遠くから何やら震動が近づいてきて、自分の所を通り過ぎて、向こうに行ってしまうのだろう。今はみんな、それが「縦揺れだ」と分かるようになった。

事務所でも、余震で縦揺れを感じた瞬間、みんな立ち上がって後ろの本棚を押さえる習慣が身に付いた。 (伊藤 聰)

#### ■福岡県西方沖地震の土木屋的考察

そのとき私は、引っ越したばかりの前原市のマンションで遅めの朝食をとっていた。ちょうどおみそ汁をよそっていたところで、火を消した直後だったので、事なきを得た。前原市は震度6弱だった。我が家は、最近やっと整理したばかりの本棚が崩れたことぐらいでたいしたことにならなかったのだが、4階ということもあり、かなり余震が伝わってくる。外に出てみるとほとんど普段と変わりがなく、スーパーなどもちゃんと営業していた。ただ震源地に近いせいか、電車の開通がどこよりも遅く、筑前前原駅が開通したのは、夕方6時30分だった。ラジオで「時間がかかったのは現地を確認するスタッフが渋滞に巻き込まれたため」といっていた。

今回の地震では、かなり大きな余震もあり、初期微動であるP波（縦揺れ）と本震であるS波（横揺れ）の違いを見事に体験できた。所内でもダンプカーかと思った」「洗濯機の振動のようだった」という話が出ているが、それはP波のことだろう。

昔、前原と志摩は糸島水道に分断されていたので、前原市の中心部でありながら“周船寺”や“波多江”など、海を感じさせる地名が多くみられる。スマトラ沖地震と津波のことが頭にあったので、「昔海だったところに住むのは怖い」と思

## 近況

い、唐津街道沿いに住むことにした。今回の地震では幸いにも津波の影響はなかったが、もし起きていればと思うとぞつとする。ただ、ブルーシートを屋根にかけた家は、昔海だったところに多いように感じた。砂地盤なので、搖れが大きかったのではと勝手に考えたりしている。

(本田 正明)

### ■ 地震対策の準備は間に合わなかつたけれども

そのとき私は、車中で天神の通称西通りといわれる繁華街を、地下駐車場から出てきて数十秒経ったところだった。車が左右に揺れると同時に風を切るような音が聞こえたので、最初は竜巻と思っていたが、ビルの上から壁の破片と思われる物が歩道に落下して来るのを見て、地震と分かった。しかし、歩いていた人たちが車道に集まってきたため、動くこともできなかつた。数分間、そこに止まっていたが、家が心配になり、用事をキャンセルして帰宅。幸いにも自宅の建物も駐車場も視認できるほどの被害はなかつたが、電気・水道・ガスが止まっている可能性もあると思い、隣のコンビニに食料を買いにいった。コンビニでは、置いてあった酒等のビン類が落ちて割れ、店内には酒臭さが充満していた。

昨年10月の新潟県中越地震発生はテレビを見ているときに知り、地震対策をしておかないといけないな、という話を家でしていたところだった。家に戻って、被害を調べたところ、食器棚のコップが棚の中の下に落ちて割れていた程度で済んでいたので、一安心。地震対策はまだ準備途中で、全て揃つていなかつたが、実際に使わなければならぬ程でなかつたことは不幸中の幸いと思った。

しかし、翌日、事務所へ行くと悲惨な状況。丸一日を復旧作業に費やすこととなつた。自宅の被害に比べると相当ひどく、今回の福岡地震は建物の立地している場所と方角によってかなり違つてゐる。事務所の場合は、東西南北方向に書棚をおいていたことと、棚の二段重ねの影響が大きかつたようで、早速、棚を固定する道具を購入、壁に固定の作業を行つた。余震はいつまで続くのかなと思いながら、過ごす毎日である。

(山辺 真一)

### ■ 地震を感じた携帯電話のすごさともろさ

そのとき私は、山の中を歩いていた。太宰府市観光課の恒例企画で史跡解説を聞きながら四王寺

山を歩く会に申し込んでいたのだ。昨年の水城セミナーでは四王寺山の由来を聞いていたので、以前から改めて登りたいと思っていた。当日の参加者は30人程度であった。

地震の時は、登山道から脇道にそれた細くて急な斜面に面している道を進み、岩屋磨崖石塔群（直径97cmの岩に梵字が彫られている梵字仏などがある）を見に行っていた。その状態の中、朝から連絡があつた糸乗からの携帯が鳴り始めた。しかしどともれる状態ではない。参加者の中には、山道に慣れていない方もいたので、ひと目みたら、戻りましょうと登山道に戻ろうとしたその時、「ゴーッ」と南側から地響きがなり、ぐらぐらと地面が揺れた。「地震だ！」皆その場にしゃがみこんだ。私は岩の真下にいて、一行は列になつていたので前にも後ろにも進めず、梵字の岩が落ちてきやしないかとヒヤヒヤしていた。

ひとまず、揺れは収まり早く登山道に戻ろうと歩き始めたが、足が震えて踏み外さないか怖かつた。その間携帯電話は鳴りっぱなしになつた。朝の電話では、これから会社に行くと言っていたので、物の下敷きになつていいか心配だった。しかし、直後は携帯電話がなかなかつながらず、結局糸乗と連絡はつかなかつた。参加者の携帯電話には「震度6らしい」「家のめちゃくちゃくちゃになった」「電車や高速道路が止まっている」などいろんな情報が入つてくる。私にも家族や友人達から安否確認のメールが入つてきた。

14:00頃下山し、解散となつたものの電車は止まっており帰る手段がない。バスは遅れながらも動いていることを携帯電話で調べ、バス停で待つこと1時間。乗客で一杯のバスがやっと現れた。バスは、本来ならば都市高速に乗つて博多駅に行くのだが、非常事態のためこれから博多駅の間どこで止まつてもいいとのことで皆口々に「この辺で」と車内で声を上げ降りていった。1時間半後博多駅に着き、南区の家に帰つたが、意外にも部屋の中は大丈夫であった。携帯電話の情報網のすごさともろさの両方を感じた地震であった。

(愛甲 美帆)

### ■ 地震ではじめて家が山で良かったと思った

そのとき私は、親戚の集まりで浮羽町（現うきは市）の喫茶店でケーキを食べ紅茶を飲んでいた。揺れがきても何がなんだか分からず「おーおー」

と言いながらそのまま椅子に座っていた。少し落ち着くと冷静になり、野生の勘か女の勘か、福岡で大地震があったのかもと思った。友人に電話してみたが、何度掛けても繋がらない。すると妹に友達から『福岡で大地震』のメールが届いた。急いで車のラジオを聞くと「福岡で大地震が起きました」と言っている割には長崎の状況などを中継していた。福岡は中継ができないほど、ひどい事になっているのかと不安になった。テレビでニュースを見ようと思い、隣の吉井町（現うきは市）の役場に行った。一般用のテレビはなかったが、公衆電話があったので友人の家の電話に掛けたところようやく繋がり無事が確認できた。結局離れた所にいたばかりに、倍気疲れしたように思う。

私の家は福岡市中央区にあり、警固断層がすぐ近くにある。にもかかわらず何一つ壊れもせず無事だったのは、地盤がしっかりした山の上にあるからかと思われる。あとマンションの1階というものもあると思う。余震もほとんど感じない。福岡市西区にある友人の家はよく揺れる。友人が言うには揺れの前にミシミシとどこからか音がするらしく、本震から1週間後に遊びに行った時には「くるよ、くるよ」と余震を察知できるようになっていた。それから数日後大きな余震があり、さすがの家も結構揺れたとき家で飼っている猫はすごく驚いていた。動物なんだから察知せえよと思った。

休み明けに何人の方からご心配の連絡をいただきました。ありがとうございました。

（佐伯 明日香）

#### 「市民参加のまちづくり（事例編・戦略編）」

松尾匡、西川芳昭、伊佐淳編著 創成社



この本は、久留米大学において実施されている経済学部公開講義「市民参加のまちづくり」の内

容を基にしている。本の中では、佐賀県伊万里市において、ゴミ問題を解決するために地域の事業者が中心になって立ち上げた「伊万里はちがめプラン」や、「見て見ぬふりをしない」ことをモットーにアメリカで結成され、最近は福岡でもパトロールなど様々な活動を行っている「ガーディアンエンジェルス」、滋賀県長浜市における、土蔵造りの洋風建築を拠点とした商店街活性化の試み等、市民が中心となってまちづくりを行っている取り組みを、その活動を行っている方自身の言葉によって書かれている。一言で「市民参加のまちづくり」と言っても、その形は様々あるが、この本は事例を多数紹介しており、まちづくりに携わって日々浅い私にとっては、講義に参加しているような気分で読めた。

私は、よかネットでも紹介している「福岡・博多まちあそびの会」や、稲築町の「元気にさせ隊」に参加している。まちあそびの会では、参加者でまちなかを見てまわり、おもしろい場所に行ったり、お話を聞いたりしながら、普段生活しているだけでは見えにくいまちの姿をいろいろと知ることができた。また、稲築町「元気にさせ隊」では、役場職員や、子供、高齢者が一緒になって公園を管理し、花を植えたり、看板を立てたりしている。参加者みな和気あいあいといった雰囲気の中で、まちのシンボルをつくり、管理している。

本書に、「参加する一人ひとりが煩わしさをあえて引き受けることによって、居心地のよさを作り出していくまちづくりが可能になる」という言葉があった。また、少年犯罪が増えている昨今、

「他人に無関心で、見て見ぬふり」なことが最も差し障りのないことだという風潮の中、ガーディアンエンジェルスのように、まち中を歩きまわってパトロールし、住民の安全を守っていくというのは、まちを良くしたいという思いがなければなかなかできないことだと思う。

理想論になるのかもしれないが、煩わしさを感じたり、危険に身をさらしたりすることなく、参加者自身がワイワイ楽しんで、あそびながら、住みよいまちをつくっていくことができればいいし、そういうまちづくりのお手伝いをしたいと思う。

（原 啓介）

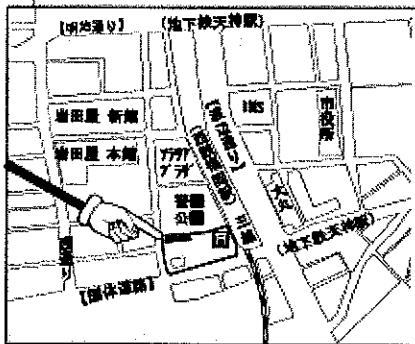
## 第13回よかネットパーティーのご案内

人と人の交流の場、「よかネットパーティー」を開催します。いい話、美味しい食べ物を持ち寄る参加型パーティーです。皆様のご参加をお待ちしております。

日時：平成17年5月14日（土）13:00～15:30  
場所：警固神社境内 中央棟

- ・「おすすめの品」は調理済みのものをお願いします。
- ・本パーティーではできるだけごみを出さないよう、例年有田焼お皿を窯元に注文しています。「ごみ軽減協力費」として1,000円のご負担をお願いします。

パーティー会場  
警固神社境内  
中央棟  
(住所：福岡市中央区  
天神2-2-20)



## 豊かな環境・景観づくりと観光産業－水の郷・柳川の原風景を探る地域づくり交流大会－

福岡県柳川市が、美しかった堀割を取り戻そうと、市役所と住民が総出で掃除を行ったのは30年余も前のことです。今では約200隻の川下り舟と100人の船頭が往き来しており、環境・景観形成と経済活動の好循環が生まれています。この全国的にも誇れる珍しい活動をテーマにシンポジウムを開催します。

とき：平成17年5月22日（日）

場所：柳川市総合保健福祉センター「水の郷」大ホール 参加費：無料

シンポジウムプログラム

- ・10:00～12:00（午前の部） 映画「柳川堀割物語」より抜粋鑑賞（スタジオジブリ制作）  
柳川堀割再生の取り組みについて
- ・13:00～15:30（午後の部） 「水の郷・柳川の原点を探り、観光産業を考える」  
○基調講演 伊藤 澄（都市計画家協会会長）  
○パネルディスカッション

【主催】柳川市観光協会 【後援】NPO日本都市計画家協会 柳川市 福岡県  
国土交通省九州地方整備局 水の会 まちづくりネットワーク柳川 筑後川流域連携俱楽部（予定）

## 編集後記

## ■プランターで野菜作りに挑戦？

インターネット会議に初めて参加しました。外から会議の様子を覗くには、動画が遅いなど改善の余地がありますが、当の現場は盛り上がりました。おいしい漬物をたくさん食べることができ、自分でも何か作ってみたくなりました。まずは、美味しいと食費も浮きそうな夏野菜をベランダで作ってみようかと思ったら、「カラスが来るよ」と言われ、躊躇しています。（あ）

■本号編集中にも、大きな余震がありました。1ヶ月経っても油断できません。事務所の被害は少なかったものの、また同じ本棚が倒れ、とりあえず横積みにしておいた本の山も崩れるなど、学習能力のなさを露呈してしまいました。福岡のまちは、一見したいしたことないようですが、建物の基礎や壁面をよく見ると、結構段差

が出来ていたり、ひびが入っていたりします。余震の震源も陸地に近づいてきているし、このビル、風が吹いただけでもミシミシいうし、まだ安心できません。（伊）

## よかネット No. 75 2005. 5

（編集・発行） 緑豊かなまちづくり研究会

懇よかネット

〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町3番8号

福岡パールビル8階

TEL 092-283-2121 FAX 092-283-2128

<http://www.yokanet.com>

mail:info@yokanet.com

（ネットワーク会社）

懇地域計画建築研究所

本社 京都事務所

大阪事務所

東京事務所

名古屋事務所

懇地域計画・名古屋

TEL 075-221-5132

TEL 06-6942-5732

TEL 042-501-2531

TEL 052-202-1411